

国際アーサー王学会日本支部
2005年度総会報告

大会費：1000円（学生無料）
懇親会費：5000円（学生4000円）

日本支部の2005年度総会は、下記のように滞りなく開催されました。

[日時] 2005年12月17日（土）
[会場] 慶應義塾大学三田キャンパス
研究棟A・B会議室
[開会の辞] 13:00 支部会長 高宮利行
(慶應義塾大学)

[研究発表(1)] 13:15~13:45
司会 不破有理 (慶應義塾大学)
発表者 青木美奈
(白百合女子大学大学院博士課程)

「Sir Thomas Malory の作品における政治地図」
[研究発表(2)] 13:45~14:15
司会 辺見葉子 (慶應義塾大学)
発表者 高木眞佐子 (杏林大学)
「地球への期待：C.S.ルイスの Space Trilogy
三部作から」
[特別展示会] 14:15~15:00 特別展示会
「アーサー王伝説 昔と今」見学
三田新図書館にて

15:00~17:00 シンポジウム
『謎の美少年』の変容—仏・独・英・伊比較—
パネリスト：

渡邊浩司 (コーディネータ・仏文)
四反田想 (独文)
小路邦子 (英文)
増山暁子 (伊文)

17:00 総会 議長 高宮利行
18:00 懇親会 中国飯店

運営に当たっては、慶應義塾大学高宮ゼミナールのお二人にアルバイトとして受付などをお手伝いしていただきました。三田新図書館に於ける特別展示では、高宮利行会長の解説のもと、30人強の会員が入れ替え制で貴重なアーサー王伝説の関連資料を見学しました。その後中国飯店にて開催された懇親会もお陰様で盛況となりました。皆様の暖かいご協力に感謝いたします。(事務局)

<総会による決定・報告事項>

1. 新入会員の承認・報告
森ユキエ (英文/同志社大学大学院)
小宮真樹子 (英文/同志社大学大学院)
林邦彦 (独文/早稲田大学大学院)
渡邊徳明 (独文/慶應義塾大学)
田中ちよ子 (英文/サセックス大学)
2. 退会希望者の承認・報告
天沢衆子 小栗友一
3. 2005年度事業・決算・会計報告
(1) 住所録訂正 (総会資料)
(2) Bulletin の住所表記確認のお願い
(3) 2005Newsletter の訂正
(4) 第22回国際大会 (2008年) について
Rennes が開催場所に決定しました。
(*1984年の第14回国際大会について二回目。)

(5) 会計報告

ビュルタン代

\$18 (冊) × 84 (人分) = ¥179.610
(\$1=¥118.79)

会員の皆様には、2006 年度会費からの値上げにご協力いただいていることを心より御礼申し上げます。会員数も少しずつ増えてはい、ます。しかし依然として潤沢な財政とはいえません。今後とも皆様の協力をお願いします。
(会計)

4. 2006 年度事業計画 承認事項

(1) 国際大会で発表した大学院生の Banquet 費用は今後日本支部が負担する。

(2) 年会費値上げ実施 (2006 年度分より。Bulletin 値上げに伴う)

一般会員：3000 円

賛助会員：5000 円

(3) 賛助会員とは別枠で寄附一口 1000 円の募集をする。

(4) 規約改正

第 5 条 (旧)「準会員の制度を設ける。準会員は本部へ報告されず、連絡費を納入して、本会の諸事業に参加できるが、会誌 (BBSIA) の配布は受けられない。また、」 → (新) 削除

第 7 条 (旧)「本支部の役員は会員の無記名投票により選出され、本部の了承を受ける。任期は 3 年とし、再選されうる。郵便による投票は認められる。選挙方法等については「役員選出規則」にあわせる。 → (新)「本支部の役員選出は、「役員選出規則」による。

7 条 2 項を追加 → (新)「幹事会の任期は改選後の 1 月 1 日より 3 年間とする。」
付則に追加 → (新) 本規約は 2005 年 12 月 17 日より効力を発する。

(5) 役員改選

選挙管理委員 高頭麻子氏、小路邦子氏

より報告

第一回 会長候補推薦の投票 (方法：封書) 9 月 30 日〆きり

10 名の推薦者の中から上位 5 名を会長候補者に決定

第二回 会長選出投票 (方法：封書) 10 月 31 日〆きり

11 月 5 日開票の結果、新会長に原野昇氏 (仏文) が選出されました。

5. 新役員選出報告

I 新幹事委員

会長 (支部長)

原野 昇 (仏文学 / 広島大学文学部)

副会長 (副支部長)

不破有理 (英文学 / 慶應義塾大学経済学部)

幹事 (庶務)・事務局長

高木眞佐子 (英文学 / 杏林大学外国語学部)

幹事 (会計)

竹中肇子 (英文学 / 東京経済大学経済学部)

幹事 (書誌)・英文担当書誌

辺見葉子 (英文学 / 慶應義塾大学文学部)

英文担当書誌 (協力)

徳永聡子 (英文学 / 慶應義塾大学文学部非常勤講師)

仏文担当書誌

嶋崎陽一 (仏文 / 龍谷大学社会学部)

独文担当書誌

四反田想 (独文 / 広島大学文学部)

6. 2007 年度総会について

日時：2007 年 12 月 15 日 (土)

場所：中央大学

上記の通りに決定しました。

<2005 年度総会研究発表 要旨>

個人研究発表

Sir Thomas Malory の作品

における政治地図

青木美奈

Arthur は、ブリテンの王と呼ばれることが多い。Sir Thomas Malory は、材源の *The Vulgate Cycle* でログレスの王となっていて、自らの作品ではイングランドの王とした。Arthur をあえてイングランドの王として描くことで、物語に自分が生きた 15 世紀の政治的な地勢図を反映させていると思われる。本発表では、“Tale of King Arthur”を中心に、Arthur が象徴するイングランドに対し、スコットランド、ウェールズ、そして、Malory の作品では、脅威として描かれているイングランド北部といった周辺地域が、どのような立場をとっているかを考察した。

前述の地域の王たちは、Arthur の即位を認めず、戦いを仕掛ける。Malory が作品を書いたのは、バラ戦争の真只中であり、イングランド北部の有力貴族の支持が得られるか否かで、王権の維持が左右された。Malory の作品に現れる北部に関する記述には、バラ戦争の反映が指摘されている。また、ウェールズは、イングランドの属国ではあったが、完全に併合されていたわけではなく、敵味方いずれの存在になるかは、未だ不確定であった。さらに、スコットランドは、直接この戦争に関わってはいなかったが、イングランドとは、中世を通じて緊張関係にあった。内乱の時代に攻め込まれたら征服される恐れがある。

周辺地域の王たちが、Arthur に忠誠を誓って“Tale of King Arthur”が幕を閉じることから、Arthur の王権が確立したことを示している。王権の動揺が安定に転ずる同時代の期待が反映されているのではないだろうか。

こうして作品に反映された 15 世紀のイングランドと周辺諸国の関係は、当時の読者や聴衆と Arthur の物語の距離を縮める

効果があったと考えられる。

地球への期待： C.S. ルイスの Space Trilogy 三部作から

高木真佐子

ルイスはアーサー王伝説のモチーフをその作品の中に多く用いたことで知られる。Space Trilogy の第三作『忌まわしき砦』(1945) に登場するマーリンはその代表的な例だといえよう。しかし三部作を通して物語の構造の底辺にアーサー王伝説が意識されており、特に主人公ランサムと聖杯伝説の解釈とが相関関係を持って描き出されている。そのことは、ルイスがこの作品に込めたメッセージを正しく読み取るために極めて重要である。

第一作『沈黙の惑星を離れて』(1938) では、イングランドの言語学者ランサムが火星へ赴き人間よりも「高次な」生命体の存在との交流を経験する。そこでは人間における善と悪との相克が描かれ、聖杯を探求する騎士が火星で聖杯の存在を感じるというアレゴリーとしても解釈できる。新たな力を得たランサムは金星へと移送され、第二作『ペレランドラ』(1943) に物語は移る。そこは金星であり、楽園である。神の国にたどり着いたランサムはそこが自分の最終的な到達点であると感じる。彼自身に「聖杯」の守り手としての自覚が生まれる。しかしまだそこに永住すべき時期はきていない。悪が力を増しているからだ。そのためランサムは腿に傷を負い、地球に帰ることになる。この負傷は *dolorous stroke* を受けた漁夫王が苦しみ、その支配する土地が全て荒地になるという、あの聖杯城を支配する漁夫王のアレゴリーそのものである。

こうして第三作『忌まわしき砦』の幕が上がる。ランサム自身フィッシャーキング(漁夫王)の名である団体の主催者となり、

腿に傷を負っている。僅かな善なる人々は精一杯抵抗するが、地球における悪の力にははや圧倒的に増大しており、最終決戦を迎えるしかない。

問題は、こうした未来世界を描き出して見せたルイスが、聖杯伝説の織り成す世界観をどう捕らえたのかという点だ。答えは、世界崩壊、即ち漁夫王の城の消失後にぼんやりと訪れる「薄明かり」である。その描写は T.S. エリオットの『荒地』にも酷似し、エリオットが経験した第一次世界大戦後の荒廃とルイスが経験した 1945 年当時の荒廃とは聖杯探求後のイメージを通して重なり合う。空想科学小説としての外形を持ちながらも聖杯伝説の枠組みを使用したこの作品は、まさに人間の聖杯探求の苦悩と荒廃、そして希望を描き出そうとしている。

特別展示会「アーサー王伝説 昔と今」

於三田新図書館

高宮利行支部会長の企画・監修により十五世紀の美しい細密画から 2005 年のブロードウェイ・ミュージカル『スパマロット』にいたるまで、視覚に訴えるアーサー王伝説の作品を展示。

企画・監修 慶應義塾大学高宮利行教授
三田メディアセンター展示委員会

シンポジウム『謎の美少年』の変容

—仏・独・英・伊比較—

<フランス>

—Renaut de Beaujeu 作 *Le Bel Inconnu* の 作品世界—

渡邊浩司 (中央大学)

Renaut de Beaujeu 作 *Le Bel Inconnu* は、「謎の美少年」型の先駆的作品であり、シャンティイのコンデ美術館付属図書館蔵 472 番写本 (13 世紀中葉) が唯一伝えるも

のである。物語の主人公は、ゴーフアンが妖精との間にもうけたガングランである。物語冒頭「謎の美少年」としてアーサー王宮廷に登場したガングランは、「荒廃の町」で大蛇の姿に変えられていた王女「ブロンド・エスマレ」を解放する。物語はガングランと王女との結婚で幕となるが、ガングランは冒険の途上で出会った、「黄金島」の「白き手の乙女」への愛も捨てきれずにいた。作中 1 人称で登場する語り手ルノーはエピローグで、意中の女性が自分に心を許してくれるなら、ガングランを再び「乙女」に合わせる用意があると述べる。したがってこの作品は、主人公の「伝記物語」を包みこむように、作者の自伝的な物語が外枠をなす特異な構造を持っている。冒険群を方向づける裁量権が語り手に委ねられている点や、主人公の恋愛譚の舞台が物語内の現実と異界にまたがっている点は、物語論の観点から近年評者の関心を惹いている。先行研究では、作者を特定する試み (現在ではマコネ地方の Bâgé 家の領主説が最有力)、典拠研究 (クレチアン・ド・トロワを始めとする先行作品やフォークロアの影響)、さらには「謎の美少年」型作品の系譜を辿る試み (ドイツ語版、英語版、イタリア語版との比較) に主眼が置かれてきた。

<イギリス>

—英語のロマンス *Lybeaus Desconus*—

小路邦子

14 世紀後期 (1375-1400 年頃) に成立したと考えられる 英語のロマンス *Lybeaus Desconus* は、ドイツ語やイタリア語 の作品と較べて、遙かに Renaut de Beaujeu の *Bel Inconnu* の内容に沿っており、中世的な意味において翻訳したものと言えるだろう。しかし、人物名やエピソードの順番が入れ替わっていたりして、本を目の前に

おいて訳したと言うよりも記憶に頼って書かれたものかもしれないと示唆されている。作者はその言語上の特徴から、*Sir Launfal* の作者である Thomas Chestre と考えられる。他のロマンスの素材や表現を取り込んでいる点や、文体や語法、頭韻の使用に特徴がある。また、冒頭で主人公の名と身元が明かされてしまい、*Bel Inconnu* の持つサスペンスは失われている。*Bel Inconnu* 後半のやや込み入った物語は無く、作者がここまで語って面倒になって後は端折ってしまった印象すら与える。また、心理描写や細かい情景描写が省かれている点も、英国ロマンスの特徴を良く表わしている。

(*独文の要旨は Ver. 2 に掲載致します。)

<イタリア>

—イタリアのカンターレ『カルドウィーノ』—
増山暁子

Carduino はフランスの *Li Biaus Desconneüs* とモチーフがまったく異なり、父が毒殺され、母と森に隠れ住んでいた少年が、父の仇を討って母共々身分を回復する物語である。

その過程で魔法使いによって蛇にされた貴婦人とその国を救うエピソードが入っているが、フランスと共通部分もあるとはいえ、有名な「主人公と大蛇の接吻」の場面も、この接吻により大蛇は忽ち美姫に変身、動物達も人間に戻り、瓦礫の山と化していた都も元の姿を取り戻すという、民衆をわくわくさせる魔法おとぎ話風クライマックスを形成している。もう一つの要、「知らずに父の敵を殺した事で支障なく敵一族と和解できる」という筋立ても、当時の庶民嗜好に迎合している。

無駄を排除し、単純明解、テンポも速く、面白くて退屈させない点も含めて、このようなフランス宮廷ロマンとの違いのすべて

は、*Carduino* が広場で歌われたカンターレという大道芸に属する、民衆文学であった事を示している。

総括

渡邊浩司 (中央大学)

マロリーが描くガレスやラ・コート・マル・タイユ (ブルノール) のように、身元が不明で騎士としての経験がない少年が、数々の手柄をたて一人前の騎士になるとともに、高貴な血筋であることが明らかになる人物が登場する物語を「謎の美少年」(Fair Unknown) 型と呼んでいる。この型では、少年を試練の場へと導いていく女性が登場し、女性は当初少年に対して不躰な態度に出るが、少年が一連の武勇を示すと無礼を詫びて和解する。クレチアン・ド・トロワの遺作『聖杯の物語』後半に登場し、ゴヴァンを翻弄する「悪しき乙女」オルゲイユーズ・ド・ノグルは、このタイプの女性の先駆的な例である。一方で、一連の試練を経たところで少年の身元が判明するという筋書きでは、同じ『聖杯の物語』前半の主人公ペルスヴァルの冒険が想起される。これに対して同一の主人公が「謎の美少年」型を踏襲する先駆的な例は、ルノー・ド・ボジュール作 *Le Bel Inconnu* である。

今回のシンポジウムでは、12世紀末から13世紀初作品とされるルノー・ド・ボジュールの作品を起点にし、これと筋やモチーフを共有するドイツ語版、英語版、イタリア語版との比較検討を行い、「謎の美少年」型作品の変容を辿った。各報告者は限られた時間の中で、作品の写本伝承と校訂本、作品の梗概、さらには先行研究に触れた後、ルノーの作品との類似点および相違点を指摘した。シンポジウム主催者側としては、本邦では未紹介に近い4作品を日本支部総会の場で紹介するところに力点を置き、質疑応答を踏まえた上で近い将来、テーマを

絞って再検討の機会を持つという方向性で臨んだ。

ルノーの *Le Bel Inconnu* の推定創作年代をミシェル・ペレは、1190年から1205年の間と考えているが、この説が正しければ、1210年から15年の作と推定されるヴィルント・フォン・グラーフフォンベルクによるドイツ語版 *Wigalois* は、ほぼ同時期の作品ということになる。ルノーの作品が1行8音節詩句 6266 行であるのに対し、*Wigalois* は約1万2千行の長さとなっている。いずれもゴーヴァン（ガーヴェイン）の息子を主人公とする点（仏語版ではガングラン、独語版ではヴィーガーロイス）や、主人公が愛する女性のために武勲を果たし、女性を妻に迎えるという筋書きは共通している。しかしながら *Wigalois* には、フランス語版にない主人公の両親の前史と主人公の幼年時代が語られるほか、主人公の恋愛対象となる女性はラーリーエただ一人で、大蛇に変えられていた王女を「危険な接吻」により解放するというモチーフは欠如している。さらには、ラーリーエの亡き父の国コルンティーンを主人公が異教徒ローアスから取り戻す件には、フランス語版には認められない「聖戦」の雰囲気さえ漂っている。

これに対し、トマス・チェスターの作と目されている英語版 *Lybeaus Desconus* は、1375年から1400年の作という M. Mills 説をとるなら、仏・独版から優に1世紀半から2世紀弱の隔りがある。しかしながらこの英語版には、ドイツ語版が採用しなかった「危険な接吻」のモチーフが保存されている点が見逃せない。若干の挿話の順序が前後する点を除けば、英語版はフランス語版の筋書きをほぼ踏襲している。しかしながら英語版は、フランス語版で見られた2人の女性をめぐる主人公の葛藤が見られず、

主人公ゲインレインが蛇に変えられていた女性を解放すると、すぐさま結婚の宴が開かれて幕となる。そのため作品の行数も2千行強と短くなっている。

仏・独・英の3作品と比較すると、14世紀後半の作と推定されるイタリア語版 *Carduino* は、一般民衆を対象にした歌物語（カンターレ）というジャンルに属する点が大きく異なっている。したがって行数は、英語版の半分にも満たない（8行からなる節が前半は35、後半は72）。内容的には、主人公カルドゥイーノが身分を隠してアーサー王宮廷に現れた後、魔法を掛けられた都へ行き、「危険な接吻」により大蛇の姿に変えられていた貴婦人ベアトリーチェを解放し、結婚で幕となるという筋書き自体は、フランス語版や英語版と共通している。しかしながら *Carduino* では、仏・独・英3つの版とは異なり、主人公がゴーヴァンの息子ではなく、アーサー王の重臣ドンディネッロの息子であり、さらには主人公がアーサー王宮廷に向うのは、毒殺された父親の仇討ちを行うためである。フランス語版との違いについては、*Carduino* では、主人公の幼年時代がペルスヴァルのそれをなぞるように描かれている点も注目される。

以上のように、推定創作年代で最も古いフランス語版を出発点に、独・英・伊の各版を比較した場合、数々の相違点が指摘できるが、それ以上に「謎の美少年」型が、12世紀後半から14世紀末にかけて2世紀にもわたって作品の着想源になったという事実を重視すべきであろう。フランスでは16世紀にも、クロード・パタンによる散文版が作られているという事実も、この型の人気を裏付けるものとなっている。今回比較検討した4作品を、近い将来再検討する機会があれば、例えば「危険な接吻」に代表されるモチーフの変容を辿るという可能

性が考えられよう。その場合には、比較対象にクレチアン・ド・トロワやマロリーのみならず、日本の民話を加えれば、国際学会で提案しても充分魅力的な試みになると思われる。

《 活動報告—協賛事業— 》

1. 慶應義塾大学 21 世紀 COE プログラム

「心の解明に向けての統合的方法論構築」

表象 A グループ「歴史的資料における心性の表象に関する総合的研究」

心の解明のためのシンポジウム

Romance and Chronicle in Malory, Caxton, and John Hardyng

日時 2006 年 4 月 15 日 (土) 午後 2 時—6 時

会場 慶應義塾大学三田キャンパス 西校舎 515 番教室

主催 慶應義塾大学 21 世紀 COE プログラム「心の解明に向けての統合的方法論構築」

後援 国際アーサー王学会日本支部・日本中世英語英文学会東支部

司会 高宮利行 慶應義塾大学文学部教授

1. Masako Takagi, Kyorin University

‘Caxton's Political Mentality: a Printer's Copy and BL Add. 10099’

2. Dr Sarah Peverley, University of Hull
‘Political Consciousness and the Literary Mind in Late Medieval England: Hardyng, Vale, Malory and Mankind’

3. Professor E. D. Kennedy, University of North Carolina at Chapel Hill

‘Malory's Conclusion to the Morte Darthur, Hardyng's Chronicle, and Malory's Political Mentality: A Reconsideration’

『年代記』で高名なアーサー王関連の学者 Kennedy 博士、そして新進気鋭の Peverley 博士の講演が聴けるとあって、会

場には多くの来場者が詰めかけました。質疑応答も活発に行われ、盛況の内に幕を閉じました。協賛したアーサー王学会日本支部からは、事務局の不破有理氏が代表で挨拶をしました。(事務局)

2. ひかわ玲子 アーサー王ファンタジー三部作『アーサー王宮廷物語』出版

アーサー王学会日本支部は、ひかわ玲子氏が執筆したアーサー王ファンタジー『キャメロットの墓』(第一作)、『聖杯の王』(第二作)、『最後の戦い』(第三作)が筑摩書房から出版されることを受け、協賛することになりました。三部作は不思議な力を持つ双子の兄と妹の視点から、アーサー王の宮廷の誕生から終焉までを描いています。その出版記念会が下記の通り行われました。

日時: 6月2日(金) 19時より

場所: 渋谷 BUNKAMURA 4F

オーチャードホールブッフェ

発起人: 井辻朱美 菊地英行 高宮利行 巽孝之 小谷真理

協賛: 筑摩書房、日本 SF 作家クラブ、国際アーサー王学会日本支部

来場者は約百三十人。音楽演奏や映画上映などで賑わうなか、会場は終始和やかなムードに包まれていました。(事務局)

3. 「中世ウェールズ伝承」講演会

(1) 演題: The Battle of Camlan: Arthur/Mordred and Native Welsh Tradition

「カムランの戦い: アーサー/モードレッドとウェールズ伝承」(英語、日本語通訳つき)

講師: Dr Ian Hughes (連合王国ウェールズ大学ウェールズ語科主任講師)

日時: 平成 18 年 6 月 25 日 (日) 14:00~

16 : 30

場所：慶應大学三田キャンパス・研究室棟
1階 A・B会議室

(2) 演題1：『マビノーギオン』と『古事記』

講師：松本 達郎氏（獨協大学名誉教授）

演題2：Medieval Welsh Narratives: Tales, Episodes, or Texts?

「中世ウェールズ伝承：説話？エピソード？それともテキストか？」

（講演は英語、日本語通訳つき）

講師：Dr Ian Hughes（連合王国ウェールズ大学ウェールズ語科主任講師）

日時：平成 18 年 7 月 1 日（土）13 : 30～17 : 00

場所：姫路獨協大学・西館 5 階 第 3 会議室

★日本ケルト学会・語りと身体研究会共催

《 訃報 》

国際アーサー王学会会長も勤められたことのある Elspeth Mary Kennedy 博士が、2006 年 3 月 10 日にお亡くなりになりました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。（日本支部）

Elspeth Mary Kennedy, MA, DPhil, FSA (1921-2006) はイギリス人で、オクスフォードの中世フランス文学者として活躍した。第 2 次大戦中に政府の関係機関で働いていたため、24 歳でオクスフォードのサマヴィル・コレッジに入学、1953 年にはウジェヌ・ヴィナーヴァ教授がいたマンチェスター大学のフランス文学の講師となった。1966 年にオクスフォードのセント・ヒルダズ・コレッジのフェローとなり、20 年間その地位にあった。中世言語文学研究学会の会長（1984-88）、国際アーサー王学会会長（1987-90）、*Medium Aevum* の編集委員

（1990-2002）の要職にあった。またオランダ王立アカデミーのランスロット研究委員会の委員や、オランダ王立芸術科学アカデミーのホイヘンス研究所所員も歴任した。国際アーサー王学会やそのイギリス支部の年次学会では常に研究発表を行い、また若手研究者から慕われていた。2005 年 7 月にユトレヒトで開催された国際アーサー王学会では元気な姿を見せたが、2006 年 3 月急死した。

ケネディ博士は『散文ランスロ』の研究者として知られ、*Lancelot Do Lac, the Non-Cyclic Old French Prose Romance, Two Volumes* (ed.) (OUP, 1980) の本文編纂、*Lancelot and the Grail: A Study of the Prose Lancelot* (Clarendon Press, 1986) の研究、*Lancelot of the Lake* (Oxford World's Classics, 1989) への序論 という、3 部作を成し遂げた。1994 年には *Shifts and Transpositions in Medieval Narrative: A Festschrift for Elspeth Kennedy* (ed. Karen Pratt, 1994) が献呈された。共訳した *A Knight's Own Book of Chivalry: Geoffroi de Charny* (University of Pennsylvania Press, 2005) が最後の出版物となった。（高宮利行）

《 文献情報 》

☆☆☆ 英文・仏文・その他 ☆☆☆

（書誌：辺見葉子）

* 英文書誌（辺見葉子、協力：徳永聡子）

< 研究（単行本） >

◆ Kubouchi, Tadao, Keiko Ikegami, John Scahill, Shoko Ono, Harumi Tanabe, Yoshiko Ota, Ayako Kobayashi, and Koichi Nakamura, eds, *The Ancrene Wisse: A Four-Manuscript Parallel Text: Parts 5-8 with Wordlists*, Studies in English Medieval Language and Literature, 11 (Frankfurt am Main: Peter

Lang, 2005)

◆ 徳井淑子『色で読む中世ヨーロッパ』講談社メチエ 364 (東京: 講談社, 2006)

◆ 山口恵里子『椅子と身体—ヨーロッパにおける「坐」の様式』(京都: ミネルヴァ書房, 2006)

<研究(雑誌・論文集等)>

◆ 青木美奈「過去の王にして未来の王—トマス・マロリーとアーサー王の墓碑銘」『白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集』6 (2006), 7-16

◆ 伊藤盡「中世英国の神話伝説の世界 (7) ビョルンとベラの恋—熊に変えられた王子のサガ」『英語教育』55.1 (2006.4), 61-63

◆ 一, 「中世英国の神話伝説の世界 (8) ポズヴァルとホットーフロールヴル王の2人の勇士」『英語教育』55.2 (2006.5), 61-63

◆ 一, 「言語学者トールキンの横顔」『言語』35.6(419), (2006.6), 38-41

◆ 一, 「中世英国の神話伝説の世界 (9) ベルセルクル—王直属の伝説の狂戦士たち」『英語教育』55.3 (2006.6), 61-63

◆ 一, 「中世英国の神話伝説の世界 (10) フロールヴルが自分の財産を取り返すこと」『英語教育』55.4 (2006.7), 61-63

◆ 一, 「中世英国の神話伝説の世界 (11) ブルナンブルフの戦い—イングランドのエセルスタン王の大勝利」『英語教育』55.5 (2006.8), 61-63

◆ 一, 「中世英国の神話伝説の世界 (12) 粗毛ズボンのラグナルと彼の息子たち」『英語教育』55.7 (2006.9), 61-63

◆ 奥田宏子「墓と飼葉桶—ヨーロッパ中世における演劇の発生」『能と狂言』3 (2005.6), 119-24

◆ O'Rourke, Jason, and Toshiyuki Takamiya, 'Two Hitherto Unrecorded Fragment of the *Bruf*, *Notes and Queries*, 52.2 (2005.5), 162-63

◆ Kato, Takako, 'Corrected Mistakes in the Winchester Manuscript', in *Re-Viewing 'Le Morte Darthur': Texts and Contexts, Characters and Themes*, ed. by K. S. Whetter and Raluca L. Radulescu, *Arthurian Studies*, 60 (Woodbridge: Brewer, 2005), 9-25

◆ 一, 'Towards the Digital Winchester: Editing the Winchester Manuscript of Malory's *Morte Darthur*', *International Journal of English Studies*, 5.2 (2005), 175-92

◆ 河崎征俊 「'tempus' と 'aeternitas': *The Knight's Tale* における Chaucer の「時」の意識」『英米文学』(駒沢大学文学部英米文学科) 40 (2005), 99-120

◆ 高木眞佐子 「ナルニア国物語とマロリーの *Le Morte Darthur—The Voyage of the Dawn Treader* における聖杯のアレゴリー」『杏林大学外国語学部紀要』18 (2006), 195-211

◆ Takahashi, Isamu, 'Is Byron a True Manichaeon? A Conservative Reply to

Romantic Revisionism', *Poetica*, 63 (2005), 49-62

◆ Tokunaga, Satoko, 'Early English Printing and the Hands of Compositors', *International Journal of English Studies*, 5.2 (2005), 149-60

◆ Dohi, Yumi, 'Melchisedek in Late Medieval Religious Drama', *The Dramatic Tradition of the Middle Ages*, ed. by Clifford Davidson (New York, NY: AMS, 2005), 109-27

◆ Haruta, Setsuko, 'One Flew Over the Trojan Wall', 『広島大学フランス文学研究』24 原野昇教授ご退職記念特集号 (2005), 101-07

◆ 不破有理「負の英雄の誕生—アーサー王の息子・甥モードレッド」『アジア遊学』(特集 古今東西のおさな神) 87 (2006.5), 120-32

◆ 辺見葉子「「ケルト」神話とファンタジー」『言語』(特集 ファンタジーの詩学—想像力の源泉をたずねて) 35.6(419) (2006.6), 29-37

◆ 松田隆美「中世英語の宗教写本における comilatio と ordinatio—Bodl. Libr. MS Douce 322を中心に」『西洋精神史における言語と言語観—継承と創造』(東京: 慶應義塾大学言語文化研究所, 2006), 283-303

◆ ー, 「眼差しのむこうのイタリア—近代初期イギリスと風景の誕生」『風景の研究』柴田陽弘編 (東京: 慶應義塾大学出版会, 2006), 127-61

<翻訳>

◆ ミランダ・J・グリーン『ケルト神話・伝説事典』渡辺充子, 大橋篤子, 北川佳奈訳, 井村君江監修 (東京: 東京書籍, 2006)

◆ ジェフリー・チョーサー『トロイルス』岡三郎訳・解説, トロイア叢書 4 (東京: 国文社, 2005)

◆ 瀬谷幸男訳『ジャンキンの悪妻の書—中世のアンティフェミニズム文学伝統』(東京: 南雲堂フェニックス, 2006)

◆ ー, 「遍歴学僧の歌—中世ラテン俗謡集 (5)」『北里大学一般教育紀要』10 (2005) 128-104

◆ アンドレア・ホブキンズ『西洋騎士道大全—図説』松田英, 都留久夫, 山口恵里子訳 (東京: 東洋書林, 2005)

◆ トマス・マロリー, 『アーサー王物語 (3)』井村君江訳, オーブリー・ピアズリー挿絵 (東京: 筑摩書房, 2005)

◆ ー, 『アーサー王物語 (4)』井村君江訳, オーブリー・ピアズリー挿絵 (東京: 筑摩書房, 2006)

<海外新潮>

◆ 高橋勇「中世主義のイデオロギー」『英語青年』151.2 (2005.5), 98

◆ ー, 「中世復興の『哲学』」『英語青年』151.4 (2005.7), 222

◆ ー, 「文学研究の理由」『英語青年』151.6 (2005.9), 358

◆ 一, 「文学は誰のものか」『英語青年』151.8 (2005.11), 491

◆ 一, 「アーサー王の帰還はあるか」『英語青年』151.10 (2006.1), 607

◆ 一, 「中世研究と中世主義研究」『英語青年』151.12 (2006.3), 753

<その他>

◆ 高橋勇「種族を超えた恋—よくわかる『指輪物語』」『三色旗』693 (2005.12), 2-13

◆ 一, 「J. R. R. トールキン『指輪物語』(評論社)—読書のすすめ vol. 6」『三田メディアセンターニュース』89 (2005.12), 4 (慶應義塾図書館ウェブサイト

<http://www.mita.lib.keio.ac.jp/lib_info/susume/susume06.html>に再掲 (2005年12月))

◆ 辺見葉子「『伝承』と『神話』のはざま—よくわかる『指輪物語』」『三色旗』693 (2005.12), 14-25

<研究 (単行本) >

* フランス語関係

◆ 亀井俊介／沓掛良彦『名詩名訳ものがたり 異郷の調べ』(東京：岩波書店, 2005)

◆ 沓掛良彦『サッフォー 詩と生涯』(東京：水声社, 2006)

◆ 富盛伸夫, 石原尚子『フランス・イタリアの文字と言葉』(東京：小峰書店, 2005)

◆ 原野昇, 他『中世ヨーロッパにおける死と生』(広島：溪水社, 2006)

◆ 一, 『中世ヨーロッパにおける排除と寛容』(広島：溪水社, 2005)

◆ 武蔵大学人文学部ヨーロッパ比較文学学科編『ヨーロッパ学入門』(東京：朝日出版社, 2005)

* その他

◆ 福島治 *An etymological dictionary for reading Dante's 'The divine comedy'*, vol. 3 (Yokohama : Shumpūsha, 2005)

◆ 増山暁子『イタリア異界物語—ドロミエティ山地 暮らしと伝説』(東京：東洋書林, 2005)

<研究 (雑誌・論文集等) >

* 仏文書誌 (嶋崎 洋一)

◆ 天沢退二郎「詩のタイトル 詩の題名について気になる二、三の事柄—宮沢賢治とヴィヨンの場合を中心に」『現代詩手帖』49 (2005) 28-31

◆ 一, 「食器から聖杯—<器>の転用メカニズム」『明學佛文論叢』38 (2005) 1-10

◆ 一, «L'inexplicabilité du songe de Cahus dans *Perlesvaus*» 『広島大学フランス文学研究』24 原野昇教授ご退職記念特集号 (2005) 17-19

◆ 一, 「『エルチェの聖母被昇天劇(Misteri d'Elx)』の空中舞台装置の一考察」『人文研紀要』53 (2005) 251-85

◆ 井上富江「木に託した人々の夢とヴィジョン—トリスタン伝説の場合」『別府大学紀要』46 (2005) 71-82

- ◆一, «L'image des arbres dans les lais et les romans au Moyen Age (1)» 『別府大学大学院紀要』7 (2005) 57-65
- ◆一, «La nature chez Max Rouquette」『広島大学フランス文学研究』24 原野昇教授ご退職記念特集号 (2005) 108-117
- ◆一, «Un fil d'Ariane à re-tresser」『広島大学フランス文学研究』24 (2005) 219-222
- ◆ 今田良信「古フランス語におけるC V S語順の平叙文の名詞主語と人称代名詞主語について-13世紀散文作品 *La Queste del Saint Graal* を資料として-」『広島大学フランス文学研究』24 原野昇教授ご退職記念特集号 (2005), 372-83
- ◆ 小川直之 «Une devineresse musulmane et sa prophétie sur l'invasion chrétienne en Palestine dans l'histoire poétique de la croisade (1)» 『人文研紀要』(中央大学人文科学研究所) 53 (2005) 196-226
- ◆ 岡田真知夫「古仏語覚え書き(1)」『人文学報』336 (2005) 81-96
- ◆ 殿原民部「或る零葉」『流域』58 (2006) 30-33
- ◆一, «La Souveraineté de Gauvain dans le Château Merveilleux」『広島大学フランス文学研究』24 原野昇教授ご退職記念特集号 (2005) 118-157
- ◆佐佐木茂美「メナール教授講演-『散文トリスタン物語』に於ける独創性(配布資料)」『明星大学研究紀要』13 (2005) 242-241
- ◆一, 「メナール教授講演「マルコ・ポーロの『東方見聞録』における日本のイメージ(配布資料)」『明星大学研究紀要』13 (2005) 243-242
- ◆一, 「物語の発生空間-「松の泉水」より「オリーブの泉水」へ」吉田敦彦ほか『神話・象徴・文化』(名古屋: 楽浪書院, 2005) 73-192
- ◆一, 「『一本の木の下にあって』(物語の発生)」『流域』57 (2005) 12-21
- ◆ SASAKI, Shigemi, «Le Conte d'Apollo et de son lévrier», *Romania* 123 (2005) 51-79
- ◆篠田勝英「『薔薇物語』を読んだ人々」『流域』57 (2005) 2-11
- ◆篠田知和基「夢の中の巡礼-『ポリフィルス』の夢」と「マグダラの説教」から19世紀フランス幻想文学へ」『広島国際研究』11 (2005) 265-79
- ◆篠田知和基, 丸山顕徳編『世界の洪水神話-海に浮かぶ文明』(東京: 勉誠出版, 2005)
- ◆嶋崎陽一「マルク王のローグル国への旅『散文トリスタン』への一視座」『言語文化』(明治学院大学言語文化研究所) 22 (2005) 14-25
- ◆ STANESCO, Michel, «Le paradoxe du Moyen Age」『広島大学フランス文学研究』24 原野昇教授ご退職記念特集号 (2005) 286-302
- ◆瀬戸直彦「写字生への信頼」『流域』57 (2005) 46-55

- ◆ 原野昇「*Pèlerinage de l'Ame*の新発見断片写本」『フランス語フランス文学研究』88 (2006) 115-22
- ◆ 一, 「『狐物語』γ群テキストの特徴—第十四枝篇の場合—」『表現技術研究』2 (2006) 1-9
- ◆ 一, 「ルナールとイブ」『流域』57 (2005) 29-35
- ◆ 一, 他「<座談会>フランス中世文学と日本」『流域』57 (2005) 56-63
- ◆ HARANO, Noboru, «Un fragment du *Pèlerinage de l'Ame*», in *Romania* 124 (2006) 215-17
- ◆ 一, «De Renart à renard», in *Qui tant savoit d'engin et d'art Mélanges de philologie médiévale offerts à Gabriel Bianciotto, Poitiers CESC* (2006) 151-58
- ◆ 細川哲士「百年目のヴィヨン」『流域』57 (2005) 36-45
- ◆ 松原秀一「チャンピオン移転」『流域』57 (2005) 22-28
- ◆ 松村剛 «Notes de lexicographie française» 『言語・情報・テキスト東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻紀要』12 (2005) 33-41
- ◆ 一, 武蔵大学人文学部ヨーロッパ比較文学学科編『ヨーロッパ学入門』(東京:朝日出版社, 2005)
- ◆ 横山安由美「シモーヌ・ヴェイユと中世と「距離」」『流域』58 (2006), 34-37
- ◆ 一, 「アリマタイヤのヨセフとロバー『ペルレスヴォー』にみる騎士のアイデンティティ」『広島大学フランス文学研究』24 (2005) 560-71
- ◆ 渡邊浩司「西欧中世の韻文<トリスタン物語>におけるイゾー像とその原型をめぐって」『フランス—経済・社会・文化の位相』佐藤清編著 (東京:中央大学出版部, 2005) 97-112
- ◆ 一, 「クレチアン・ド・トロワ作『イヴァン』の「ネタン」をめぐって—「海の怪物」神話の視点から」篠田知和基編『神話・象徴・文化 吉田敦彦, オギュスタン・ベルクほか』(名古屋:楽浪書院, 2005) 717-42
- ◆ 一, 「『馬銜のない牝騾馬』と民話の国際話型 AT325」『人文研紀要』(中央大学人文科学研究所) 53 (2005) 177-98
- ◆ 一, 「アーサー王物語」とクマの神話・伝承」『中央大学経済学部創立100周年記念論文集』(2005) 531-49
- ◆ 一, 「土用の神話とイヴァンの狂気」『広島大学フランス文学研究』24 (2005) 544-59
- ◆ 一, 「<アーサー王物語>における<異界>—不思議な庭園とケルトの記憶」『異界の交錯(上巻)』細田あや子・渡辺和子編 (リトン, 2006) 127-48
- ◆ 一, 「<ブルターニュの短詩>に見られる<口承性>をめぐる考察」『ケルト 口承文化の水脈』中央大学人文科学研究所編 (中央大学出版部, 2006) 153-76

◆ 一, 『名無しの美丈夫』におけるゴーヴァン『仏語仏文学研究』(中央大学仏語仏文学研究会) 38(2005) 77-91

◆ 一, 「クレチアン・ド・トロワ作『聖杯の物語』における「義足の男」の謎」篠田知和基編『神話・象徴・文化 II 栗原成郎、吉田敦彦ほか』(名古屋: 楽浪書院, 2006) 135-158

◆ 一, 「『名無しの美丈夫』におけるゴーヴァン」『仏語仏文学研究』(中央大学仏語仏文学研究会) 38(2005) 77-91

<翻訳>

◆ エーリヒ・アウエルバッハ『中世の言語と読者—ラテン語から民衆語へ』小竹澄栄訳(東京: 八坂書房, 2006)

◆ ノルベルト・オーラ『中世の死—生と死の境界から死後の世界まで』一条麻美子訳(東京: 法政大学出版局, 2005)

◆ ハミッド・ネジャット「ザラシュトラの教えとペルシア文化への影響—フェルトウスイーの『王書』を例に」渡邊浩司訳『仏語仏文学研究』(中央大学仏語仏文学研究会) 38(2006) 205-19

◆ フィリップ・ヴァルテル『『怪物の書』(8-9世紀のラテン語作品)における海の怪物』渡邊浩司訳『比較神話学シンポジウム—海の神話・神々と怪物(2004年9月、南山大学)原稿集』、比較神話学研究組織G RMC、50-56.

◆ ハミッド・ネジャット「ザラスシュトラの教えとペルシア文化への影響—フェルトウスイーの『王書』を例に」渡邊浩司訳『仏

語仏文学研究』(中央大学仏語仏文学研究会) 38(2006) 205-19

◆ フィリップ・ヴァルテル「ヨーロッパの諸伝承における火を盗む鳥キクイタダキ」渡邊浩司訳『比較神話学シンポジウム 風と鳥の神話学—天かける神霊(2006年9月、花園大学)原稿集』比較神話学研究組織G RMC、42-52

◆ ミシェル・パストゥロー『青の歴史』松村剛, 松村恵理訳(東京: 筑摩書房, 2005)

◆ 『黙示録—MS R.16.2—ケンブリッジ・トリニティ・カレッジ図書館蔵本ファクシミリ版』大高順雄, 黒岩三恵訳, ナイジェル・モーガン, テレイザ・ウェッバー, イアン・ショート解説(東京: 岩波書店, 2006)

<書評>

◆ 渡邊浩司評『世界の神話 101』(吉田敦彦編、新書館)『中央評論』(中央大学) 58.1(通巻第255号)(2006) 150-53

<その他>

◆ 「原野昇先生の略歴と主要著作目録」『広島大学フランス文学研究』24 原野昇教授ご退職記念特集号(2005) 5-15

◆ 渡邊浩司「<フォーラム・オン>聖杯伝説—その起源と展開を再考する」(総括)『ケルティック・フォーラム』(日本ケルト学会) 8(2005) 29-30; 「中世フランスにおける聖杯物語群の展開」(発表要旨) *ibid.*, 31-32

◆ 一, 「<アーサー王物語>の淵源をケルトに探る—アーサーとマーリン」(講演記録)『CARA』(日本ケルト協会) 13(2006) 14-21

《学会・講演会のお知らせ》

- 第23回中世英語英文学会全国大会
12月8日(土)・9日(日)
駒澤大学(東京都世田谷区)にて

《2006年日本支部総会のお知らせ》

日時: 12月16日(土) 受付1時~(予定)
場所: 日本女子大学目白校舎 百年館
502・503会議室(別紙参照・発表者の使用機器によって変更の可能性あり)
プログラム: (予定)

個人研究発表 13:30~

- ・渡邊徳明(仏文)『ニーベルンゲンの歌』(仮題)
- ・小川直之(独文)「アーサー王が最高の騎士と認めた旧イスラム教徒ユオン・ド・タバリ(仮題)」

シンポジウム

ーガウェイン裁判 14:30~

- ・小路邦子(司会・コーディネータ)「ラテン語のガウェイン幼少期」
- ・不破有理(パネリスト)「ウェールズの伝承+『頭韻詩アーサーの死』」
- ・小宮 真樹子(パネリスト)「トマス・マロリーにおけるガウェイン」
- ・嶋崎 陽一(パネリスト)「ドイツ中世文学におけるガウェイン」

総会 16:30~

懇親会 18:00~

大会費: 1000円(学生無料)

懇親会費: 5000円(学生4000円)

<シンポジウムーガウェイン裁判>

2006年度支部大会では試みに、ガウェイン像の成立に関するシンポジウムを「裁判形式」で開催することにいたしました。この形式は、あのモンティ・パイソンの一員であるテリー・ジョーンズがチャーサー学

会で行った模擬裁判にヒントを得たものです。アーサー王伝説の登場人物の中でも、作品によって印象が顕著に異なる騎士として、ガウェインの右に出るものはいないでしょう。果たして彼は稀代の女たらしなのか、はたまた礼節の騎士なのか。小路邦子氏がコーディネータ及び司会をしてくださることになっています。(事務局)

マロリーの 'The Tale of King Arthur' において語られる、ガウェインがペレアスの恋を取り持つ役を引き受けながら彼からエタードを奪った話は、Suite du Merlin を基にしています。このガウェインの行為は果たして罰されるべき「裏切り」として告発したならば弁護の余地はあるのか。また、一般に英国では『ガウェイン卿と緑の騎士』にあるように礼節の鑑とされている一方で、フランスでは女性に対して手が早いとされているガウェイン像はいつどのように成立してきたのか。その他の国でのガウェイン像はどのようなものなのか、などといった点を裁判形式によって探してみたいと思います。パネラーの皆さんにはそれぞれに弁護側と批判側から論じていただき、さらにフロアからも証人喚問などにより積極的な参加をお願いしたいと思います。(小路邦子)

<2006年度懇親会会場について>

懇親会会場は、目白駅から徒歩約3分のピザ・パスタ店 TO THE HERBS になりました。目白駅前大通り=目白通りを落合方面に直進して左側です。多くの皆様の参加を、お待ちしております。(開催校)

《会費納入のお願い》

会員の皆様におかれましては、下記の通り 2007年度分会費のご入金をよろしくど

うぞお願い申し上げます。(各自、同封別紙
をご覧ください。)

＜郵便振替口座番号＞

加入者名：国際アーサー王学会日本支部

口座番号：00250－6－41865

会計：竹中 肇子

一般会員：3000円

賛助会員：5000円

＜ 寄附金募集のお知らせ ＞

日本支部では、全ての会員の方から一口
1000円で寄附金の受付を行っております。
寄附納入ご希望の方は、会費納入と一緒に、
「寄付 〇口」とお書き添えの上、寄付金
を会費と合わせて納入して下さい。皆様の
暖かいご支援をお待ちしております。

＜ 住所変更のご報告のお願い ＞

移転その他で住所など変更があった場合
には、お手数ながら速やかに事務局
(takagi@kyorin-u.ac.jp)までご連絡くだ
さい。ご協力をよろしく申し上げます。

＜ 個人情報保護法に伴う会員名簿 掲載事項の見直しのお知らせ ＞

事務局では、昨今の個人情報保護法の動
きに伴い、これまでの会員名簿の掲載事項
を見直すことといたしました。つきまして
はこれまで慣例としてお送りして参りまし
た、従来の会員全員の住所録は、今回お送
りいたしません。後日、皆様に掲載事項に
関するアンケート葉書をお送りさせていた
だき、改訂版を今年度総会(12月16日)
に合わせて発行する予定です。学会への出
欠届けと合わせて、アンケートへのご協力
をよろしくお願い申し上げます。

△▲△ 編集・発行 ▲△▲

国際アーサー王学会日本支部事務局

(庶務担当)

〒192-8508 八王子市宮下町 476

杏林大学外国語学部 高木真佐子

電話・FAX：042-691-0011 (内線 3530)

E-mail：takagi@kyorin-u.ac.jp

*MLリストご利用は

king-arthur@ml.hc.keio.ac.jp

*学会のホームページは

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/iasjp/>

へどうぞ。

(編集後記)

2006年に原野昇先生を新しい日本支部
の会長にお迎えし、新体制を立ち上げたも
のの、事務局に多くの不手際があり、
Newsletterの発行が遅れてしまったことを
深くお詫び申し上げます。例年よりも一ヶ
月以上も遅い Bulletin 発送となりました。
一方、日本女子大学の高頭先生をはじめ多
くの先生方のご協力の下12月16日の総会
準備は順調に整っております。多くの皆様
のご来場をお待ちしております。

書誌情報については、辺見葉子氏(英文)、
嶋崎洋一氏(仏文)、四反田想氏(独文)を窓
口として、引き続き皆様からの積極的な宣
伝やPRをお待ちしております。その他書
誌や学会・イベント情報については事務局
(takagi@kyorin-u.ac.jp)までお知らせい
ただくか、MLリストをご活用ください。